

シカのモニタリングの不確実性

講師：東京農工大学 野生動物管理教育研究センター 高田隼人

ニホンジカは高密度化しやすく、植物へのインパクトが大きいため、生態系への影響が大きい動物です。国の管理目標は農林業被害の軽減と生態系への影響抑制を目指し、令和 10 年度までにシカの個体数を半減させることを目指しています。一方カモシカは特別天然記念物として保護されていますが、全国的に減少傾向にあり、特に南西地域で顕著です。

山梨県富士北麓では、1970～1980 年代には山地帯の中腹に極少数が生息していましたが、1990～2000 年代にはシカの急増と農林業被害が発生し、2010 年代からは大量捕獲が開始されました。山梨県では階層ベイズモデルによるシカの個体数推定が行われており、2012 年をピークに減少傾向にあると公表されていますが、十分な調査が行われているかは疑問が残ります。

富士北麓でのライトセンサス調査では、2008 年から現在まで亜高山帯も含む北麓広域を網羅してシカの個体数をカウントしています。2014 年頃に一時的に減少しましたが、近年は急増傾向にあります。中標高域では高質な餌が豊富に存在し、高標高域では餌が貧弱ですが、人間による捕獲圧がシカの分布に非常に強い影響を与えています。

行政のモニタリングはアクセスが容易な地域で実施されており、過小評価されている可能性があります。捕獲圧が強化されると、シカは中標高域から高標高域へ移動し、亜高山帯森林での樹皮剥ぎや高山植物の減少など、富士山の亜高山・高山生態系が危機的状況にあります。また、人家周辺では捕獲が行われておらず、農業被害、交通事故、感染症リスクの増加が問題となっています。

限られた調査地点で広域のシカの実際の生息状況を把握するのは困難であり、シカの空間分布や行動パターンは人の捕獲圧に敏感に変化します。シカの高標高域への進出や市街地付近での増加は全国的にも起きており、人との軋轢を軽減し、生態系を保全していくためには適切なモニタリングと管理が必要です。